
明治おいしい牛乳

黒金蚊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明治おいしい牛乳

【Zコード】

N50920

【作者名】

黒金蚊

【あらすじ】

実話を元にノープロットで書いた出来そこない。

牛乳の脅威と、人間の頑丈さ。

それが此処に。

(前書き)

非常に汚いネタになります。あらかじめご了承ください。

人とは意外と丈夫に出来ている。確かに当たり所が悪ければありますと命を落とす事となるが、あくまで当たり所が悪ければだ。そう実感できた実話を紹介したい。

本当に、実話なんだ。

深夜の事である。

寝付きが悪く、悪あがきに喉を潤そと一階に降りた。無論誰も起きておらず、暗闇の中静かに居間の電気を灯す。

キッチンへ向かい、冷蔵庫を開けば買い溜めしている500mlの小岩井コーヒーが待ちかまえていた。5本あるそれのうち一番賞味期限の古いものを確認する。

10・1／21と表記された賞味期限。それはまだ数日の余裕を持つていることを示していた。

口を開けグラスに注ぐ。透明なグラスを染めていくのは濁った液体。実に淫美であろうか。小岩井コーヒーの恐ろしさ。

夜中のテンションで注いでいる所にレールが擦れる音が響いた。音の発生源に振り向くと、ドアを開けてこちらを覗いていたのは祖母であった。

「どうしたん？」「んな時間に」

視線をふと降ろすと、祖母の手には1本の1000ml明治おいしい牛乳があつた。

「これをちょっと入れ忘れとったんだわ」

祖母はそそくさと冷蔵庫を開け、丁寧に先程まで小岩井コーヒーがあつた場所にもつとも身近にあつた牛乳パックを押し込み、一番手に取りやすい位置に明治おいしい牛乳を君臨させた。

この時に気付くべきだったのだ。己の危機管理の無さが犠牲者を呼ぶ事にならうとは夢にも思わなかつた。

翌朝の事である。翌朝といつのは私が小岩井コーヒーを飲んでから1日と6時間が経っている。

大学の講義が1限からあり、出席日数もギリギリな為、根性で起きた朝。姉はやけに騒がしかつた。

「お前牛乳飲んでないよな？」

牛乳と言われ、昨日の深夜の出来事が沸いた。

うちの祖母は何かと”やらかす”人だ。エピソードは尽きないのだが、ここであえて一つあげたい。

我が家家の駐車場は庭を犠牲にしたお陰で、車を4～5台置けるスペースがある。詰めに詰めれば5台なので基本的には4台だと思つていただきたい。

その駐車場に置かれた花崗岩があつた。その花崗岩の形は古銭の様であるが、いかんせん大きさが直径1m、幅も50cm程もあつた。

そんなものがいつも駐車場に掛け置きされていた。

とある日の出来事である。

ふとその花崗岩を見ると、大きな筋が3つ存在した。こんな筋あつただろうかと凝視すると、直径1mもある花崗岩が大破していたのだ。しかもボンドで直そうとした形跡があるではないか。

こんな物を易々と壊せるのは、我が家でクラッシャーと名高い祖母だけである。さらに言うなれば、大破した花崗岩をボンドで大まかに直す程の豪快さを持っているのも祖母だけである。

しかし、祖母はただ一言。

「知らん」

それしか弁解しなかつた。私の知らぬ間に割られてしまった萩焼きの茶碗を、知らぬ間にゴミに出そうとしていた祖母のいうことである。我が脳内裁判所では信憑性は無いに等しいと判決していた。

「」の様な事を日常茶飯事で起こす祖母である。そこに昨日の深夜の奇怪な行動と姉の慌てぶり。事件が起きたとしか思いようがないのである。

私は冷蔵庫へ赴き、問題の明治おいしい牛乳を手に取った。

半分以上は飲まれた様で思いの外軽く感じた。

しかし、ここではようやく事態の重みに気付いたのだ。

賞味期限を見ると、10/21と表記されていたのだ。

まずは我が田を疑つた。一度、二度、田を擦つては日付を確認した。

10/21。

そうか。9ヶ月も賞味期限の持つ牛乳なんてものがあるのか。次に私はそんな逃避を企てた。

09・10・21。

どうみても去年の10月であった。

ここで私はようやく現実を受け入れることに成功出来たのだった。ちょっと入れ忘れたで3ヶ月前の牛乳を入れる祖母の存在は未だ受け入れがたいのだが、目の前にいる以上信じるしかないのだ。

中身がどうだつたのか。気になる方もいるだろう。しかし、チキンな私に中身を確認するという暴挙など出来るわけもなく、ただただ静かに冷蔵庫へ返還するのみであった。

明くる日の事。少し遅めに起きた私に待ちかまえていたのは、空になつた明治おいしい牛乳のパックと、ホットミルクを飲んだ形跡のあるマグカップがふたつ。

祖母と祖父一人で飲みきつたのだった。

私は何事も無かつた様に振る舞う祖母に畏怖しながら今日も過ぐしている。

余談に汚い話で申し訳ないのだが、飲みきつたその日。

洗濯に出された祖父の下着は茶色に染まっていた。
発見したその時、居間に悲鳴が響いたのはいつまでもない。
終

(後書き)

慣れない文体で書いた作品。一年ほど前の作品でしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5092o/>

明治おいしい牛乳

2010年10月25日18時50分発行